

特集 誰の平和を守るのか？

2面 「安全保障によって日常生活が脅かされている」

寄稿・山本章子（琉球大学准教授・国際政治学者）

3面 「大好きな`沖繩、の現実を見てほしい」

寄稿・明有希子（`基地のそばで暮らすということ、語り部）

6～7面 日本YWCAのプログラム報告

The Young Women's
Christian Association

YWCA

6

JUNE
2023

No.774

〈第33総会期主題聖句〉

平和を実現する人々は幸いである
—マタイによる福音書5章9節—

〈ビジョン〉

女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切に社会

〈ミッション〉

若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉

キリスト教基盤 平和・環境 人権 セーフスペース

www.ywca.or.jp

沖繩の日常から考える 軍備増強

沖繩本島は言うまでもなく、石垣島、与那国島、宮古島、奄美大島などの島々で、

自衛隊による軍事拠点化が進んでいる。

政府は、憲法の平和主義をゆがめる「国家防衛戦略」を打ち出し、南西諸島を国防の最前線と位置づけ、

今年3月、新たに石垣島に自衛隊の駐屯地を開設。迎撃部隊を増員し、ミサイルを配備した。

「国民の命と平和な暮らしを守り抜くため」というが——。

軍備増強は、「自衛隊事」でも、「沖繩事」でもない。私たち一人ひとりの生活と地続きにある。

軍事力に囲まれた暮らしを、私たちは本当に望んでいるのだろうか。

沖繩の人々の日常と本音から感じとって、自分事として考えてみたい。

軍基地の から

安全保障によって 日常生活が脅かされている

琉球大学准教授・国際政治学者

山本章子



「世界一危険」と称される普天間飛行場。滑走路から住宅地までおよそ160mしかない

ドーナツ型の宜野湾市

私の住む沖縄県宜野湾市には米海兵隊の普天間飛行場があります。東京ドーム約1003個分もの米軍基地が市の中心にあるのは、作家の百田尚樹氏が発言した「もともと田んぼで、何もなかった」場所に米軍基地が作られ、その周辺に住民が住みついたから、ではありません。1945年の沖縄戦で上陸した米軍が集落をつぶして基地を建設、住みかを失った住民がその周辺に移動しただけです。

真ん中があいたドーナツ型の宜野湾市内を移動するのは時間がかかります。戦前は鉄道がありました。基地建設時につぶされました。米軍が基地から基地への移動のために造った道路は、いつも渋滞して到着時間が読めません。ところが、米軍関係者は基地の中を最短距離で移動できるので、たとえば市内の大山^{おおやま}という場所から野高^{のたか}とい

う場所まで基地の中を通れば約10分です。私たち一般住民は基地を迂回して渋滞に巻き込まれ、約30〜40分かかるのに。

騒音たてて離着陸年間1万8017回

普天間飛行場は海兵隊の航空部隊の基地です。ヘリや戦闘機は離着陸の操作が最も難しいので、海兵隊は毎日、基地から基地へと移動して離着陸訓練を行っています。市街地に囲まれた普天間飛行場を離着陸する米軍機は、生活空間の上を行き来することになります。2021年の1年間で普天間飛行場に米軍機が離着陸した回数は1万8017回。最大65デシベル、横で掃除機をかけている程度の騒音が発生しています。

日米両政府は1996年、普天間飛行場の騒音規制措置をもつめました。夜10時以降から朝6時までの離着陸は行わない、特にうるさい低空飛行はしない、学校や病院の上は飛ばさないなどの約束です。しかし、努力義務にすぎないので守られていません。2021年の深夜早朝に米軍機が普天間飛行場を離着陸した回数は464回でした。

誰のための安全保障なのか

2022年12月に岸田文雄内閣が「国家安全保障戦略」などの安保3文書を発表すると、騒音規制措置はますます守られなくなっています。民間地域での自衛隊と米軍の訓練が推奨されたからです。授業中に琉球大学の上空を10何機もの米軍機が飛び、その間にも聞こえなくなる。夕食中に建物全体が揺れるほどの低空飛行で自宅の上を米軍機が飛び、1歳の子どもがおびえて私に飛びつく。これが現在の沖縄の日常です。

中国が台湾に侵攻するかどうかは分かりません。しかし、起こるかどうかわからない戦争、日本が攻められるのではない戦争に備えて、沖縄に住む私たちの生活が脅かされていることは分かります。安全保障とは本来、国民を守ることであり、それに逆行しているといえます。



2012年に強行配備されたオスプレイ。これが何機も昼夜を問わず離着する沖縄の日常

profile

山本章子 [やまもと あきこ]

1979年、北海道生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。博士（社会学）。2020年から琉球大学人文社会学部国際法政学科准教授。著書に『米国と日米安保条約改定－沖縄・基地・同盟』（吉田書店、2017年）、『日米地位協定－在日米軍と「同盟」の70年』（中公新書、2019年）など。



大好きな「沖縄」の 現実を見てほしい

“基地のそばで暮らすということ”語り部
明有希子

真ん中に米 ある街

あなたの沖縄の空に米軍機は飛んでいる？

「沖縄が大好き！」この言葉を今までどれだけの県外の方に言われただろう。そしてどれだけの人が、そう言っただろう。あなたが「大好き」と想う沖縄とは何だろうか？

熱気を帯びた南国の眩い日差し、真っ青な海と白い入道雲の空？

うちなーぐちと三線の音色に独特の食文化？

朱色をした琉球の名残と戦後アメリカ統治下の文化をチャンプルーした異国情緒？

あなたの大好きな沖縄は、日本で唯一地上戦があった小さな島？ 20万人もの、誰かの大切な人が命を落とした島だろうか？

その島には、広大な土地を接収した世界一危険な普天間飛行場はある？

昼夜問わず爆音をまき散らす米軍機が飛び交っている？

あなたが想う青い海に、永久に消えない化学物質*PFASの汚染水は垂れ流れされている？ 普天間飛行場返還の身代わりになされ、埋め立てられ、新しい基地が建てられている？



これが、いつもの空。みんなが「美しい」と想う沖縄の空

これが沖縄です。それでも「沖縄が大好き」と言えますか？

と、問いかけたいが、あなたはきつと口をつぐんでしまっただろう。

こんな危険な場所で生活していたのか

私は普天間基地がある宜野湾市で生まれ育った。基地があるのは当たり前、不便で不愉快だけどそれが普通だと思っていた。大人になり仕事で県外に転勤し、沖縄出身だと言つと羨望の眼差しを受けた。誰も知り合いがいなくても、すんなり受け入れてもらえた気がして、ああ、沖縄出身で良かったなと安堵した。十数年前は少なくともそんな感じだった。

結婚後、宜野湾市に戻つて子育てをしていた2017年、娘が通う緑ヶ丘保育園に、上空を飛ばす米軍機から部品が落ちてきた。まさか空から雨ではなく米軍機の部品が落ちてくるなんて。

米軍はそれを認めず、その後も飛び続け、窓枠を落とそうが、コンテナを落とそうが、不時着をしようが何も変わらない。こんな危険な場所で生活していたのかと涙があふれた。

あれから私の人生は180度変わった。今はもう、異常な経験をした基地の中の沖縄でしかない。片方に目をやると眩い南国の沖縄。もう片方は米軍基地の弊害で、空も海も地上も植民地の沖縄。沖縄はフェンスの中にあるのか、外にあるのか。

現実の沖縄を見て想像してほしい

県外で働いていたころ、沖縄が好きだという人に、祖父が体験した沖縄戦の話をしたことがある。ああ、関心がないんだなと肌で感じた。

「沖縄は好き、でも基地は知らない」そんな都合のいい部分だけ切り取った沖縄があった。好き

基地問題にはならないのだ。嫌なものはない、聞かないように、無意識に都合よく蓋をしていないだろうか？ でも、過重な米軍基地負担を強い

られてはいる沖縄も同じ、あなたの大好きな「沖縄」。本土の大多数はフェンスや米軍基地のない疑似的平和の上に暮らしている。基地を持たない選択肢のある本土の人は、押し付けられている「うちなーんちゅ」とは土台が違う。

きつと自分の身に降りかからないと理解できないだろう。だからこそ、想像してほしい。好きでいるならば、蓋を開けて、現実の沖縄を見てほしい。少しだけ想像力を持って、目をフェンスのある

広大な土地へ向けて「もし自分だったら……」と。そうして少しでも「自分事」と思ってくれたら。

米軍基地問題はとても気軽な話じゃない。でも本当はもつと気軽に話したい。私は話したい。「自分だったら」と。



すさまじい衝撃音と共に保育園の屋根を直撃した米軍ヘリの部品。当時、園庭には子どもたちがいた (撮影/金井 創)

profile

明有希子 [あきら ゆきこ]

1978年、沖縄県生まれ。緑ヶ丘保育園の父母会元副会長。2017年の米軍機による落下物事故を機に、米軍基地問題を自分らしいカタチで発信している。不定期で『OKIRON』に寄稿。

*人工的な有機フッ素化合物の総称。自然界で分解されず、人体への有害性が指摘されている。

自衛隊の拠点のある街から

「時」を見分ける感性を磨くこと

防衛の最前線として、陸・海・空の自衛隊の拠点が置かれている那覇市。
地上配備型の迎撃ミサイルも那覇駐屯地を經由して石垣島へと搬出された。
那覇で日々の暮らしを営む市民は、昨今の軍備増強に何を想う――。

この子たちの将来のために
自分なりに情報を得たい

私は1984年生まれで、生まれも育ちも那覇市です。普段はパートタイムで介護職に就いており、バプテスト派の教会に通うクリスチャンです。そんな私が、日ごろ見聞きしたり感じたりしていることをお伝えします。

南西諸島にミサイルが配備されている報道を知らない人は、沖縄にはほとんどいないと思います。とはいえ、敗戦直後とは違って今の若い世代は、自衛隊に対して、一般の公務員のように「安定した職業の人」程度のイメージを抱く人のほうが多いと思います。昔とは違って、軍事に関する危機感が平均的に低いのではないかと思います。「戦争なんて簡単には起こらないよ」と言う友人も身近に何人かいます。ミサイル配備に関する私個人の意識も中途半端で、断片的な情報しかありません。それでも、日常の雑事に追われながらも自分なりに情報を得

たいと思うのは、教会で子どもたちに聖書の話をする奉仕をしていて、「少しでもこの子たちの将来を守れたら」という気持ちにさせられるからです。

こうしている間にも
為政者は戦争の準備をしている

会社の代表をしていて経済界で活躍している教会員とこの問題を含めた社会問題に関して話すことがあります。彼女は、「生きたカエルを熱湯に入れたら慌てて飛び出すけれど、常温から徐々に沸騰させれば、気が付いた時には茹で上がっている」というたとえ話をし、「私たちが常に目を覚ましていなければ、この世の価値観に染まってしまうそう。いつの間にかどんどんミサイル配備が進んで、自分の感覚もおかしくなってしまうそう。教会がないと私はとてもやっていけない……」そう漏らすことがありました。

ときどき SNS を開いて「南西諸

島」の問題に対する意識の高い人たちの投稿も読みますが、率直に言って、内容が難しいと感じることがあります。こういった流れでアメリカと中国が対立するに至ったのかも私は知りません。新聞や雑誌で「パックス・アメリカーナの終焉」というフレーズが目に入ることもあり、さあ大変な時代なようだと感じていますし、まさに沖縄で生活する者なのですが、少なくとも私個人は自分の置かれた環境について決して十分な理解はしていないと思っています。

政治の勉強もせず、抗議行動もせず、自分が遊び呆けている間にも為政者は戦争の準備を始めていると思うと、忌野清志郎の『善良な市民』の歌詞を思い浮かべてしまいます。沖縄で起こっている大事なことを、インテリでもなく特別な運動をしているわけではない「生活者」が等身大で学ぶ機会や場があればと思いながら、日々暮らしています。

沖縄 YWCA 会員 玉城郁恵

「善良な市民」

泥棒が 憲法改正の論議をしてる
コソ泥が 選挙制度改革で揉めてる
でも 善良な市民は
参加させてもらえず
また 間違つた人を選ぶ

泥棒が 建設会社に 饅頭を貰ってる
金屏風の影で ヤクザと取引してる
でも 善良な市民は
ゴールデン・ウィークに
アイスランドで 遊ぶしかない

(中略)

それが 善良な市民の生き方さ
善良な市民の 生き方さ
善良な市民の皆さんの暮らし
市民の市民たる生き方さ
どうせ 何処かで 死んじゃうだけさ
弾に当たって死んじゃうだけさ

作詞・作曲 忌野清志郎『MUSIC from POWER HOUSE』忌野清志郎& 2-3's (1993年)

沖縄の若い市民が創った小冊子『Picnic』より みんなで考えよう基地問題

沖縄県内でも基地問題を語るのは難しい。賛成・反対さまざまな意見があるからだ。でもそれは沖縄の未来のために良くない。みんなのホンネも基地の現実も、まずは知ることが大切だ。11年前、そう考えた若者たちが、沖縄のさまざまな立場の生活者の声を集めて創った幻の小冊子『Picnic』。創刊号は既に販売終了しているが、本土の人々とシェアしたいメッセージが満載だ。そこで、制作委員でもある2人の若者の声を転載させていただいた。



『Picnic』制作のきっかけとなった、普天間飛行場での抗議を兼ねたピクニック（2012年）。デモ隊に若い人が少ないことに気づき「自分たちのやり方」でアピールしようと考えた

私たちはいったい何に抗議し、誰と戦っているのでしょうか。

デモ現場に行くといつもそう考えます。ウチナンチューのデモ隊、ウチナンチューの警察官、ウチナンチューの基地ガードマン。現場で対立しているのはウチナンチュー同士。しかも、みんな相手が仕方なくそうしているのをよく理解しているのです。あまりにも悲しすぎます。

私はアメリカ兵個人個人のことも考えます。彼らだって沖縄の人が怒っているのは知っているし、これ以上嫌われるのは嫌だと思っているはずです。私たちは国や政治や軍や経済という目に見えないものによって隔てられ、対立させられているのです。

市民も警察官もアメリカ人もみんなが「いやだ」と感じているのであれば、その怒りや悲しみを「シェア」できるのではないのでしょうか。

「アピールピクニック」という方法はその抗議のシェアのひとつです。フェンスの前でピクニックしながらアメリカ兵個人に対して私たちの怒りや悲しみをシェアしてもらうのです。対立することで心のフェンスを増やすよりも、感情の共有でフェンスをほぐしていく方法を模索していけないでしょうか。

知念正作

『Picnic みんなで考えよう基地問題』

2014年の沖縄知事選のために発行した2号は販売中。専門家の解説をマンガで伝える基礎知識、辺野古「夜の社交街」ルポ、サウンドデモの作り方など若いセンスが光る意欲作。三上智恵、石川真生ら著名人も寄稿。

●問い合わせ
picnic.4.future@gmail.com



No.2 (2014年)
200円

国のために誰かが悲しくなったり悔しくなったりしてはいけないと思う

テレビで見たりするより、生でみると思ったより人数集まっていなただね。

行ってみないとわからないね。

私はお父さんがもと軍属で、とても複雑な立場だと今日まで思って、いったいどっちの味方になれば……？ってずっと思ってた。

ハーフだからうちなんちゅじゃないのか……とか。

でも今日感じたのは、ここに住んでる人がうちなんちゅで、主張する権利を持っている。

生まれた国の違いで不平等があってはいけない。

自分の子どもが生まれながらに、もう平等じゃないのかって思ったら、何とも言えない気持ちがわいてきた。

私は今日行かないと、次にいつ行くのか？

肌も生まれた場所も関係ない。

今日、ピースでかえしてくれた軍人さん。

わからないよってポーズしてた人もいた。

警察の人が、軍人も人の子だと言っていた。

そうだね。

みんな誰かの大切な大事な子どもたちだ！

やっぱり国のために誰かが悲しくなったり

悔しくなったりしてはいけないと思う。

ネットで簡単に中国と戦おうとか言ってる人も……

本当に？ その前に沢山の選択肢と沢山のいのちがあることを、考えないといけないんじゃないか？

さいごに……

昨日のうるま市のたまきさんの勇気が私にはなかったと思う。やっぱり怖いものはある。私はそんなビビヤーだからこそ、戦争って選択肢は絶対反対です！

大山ゲート前のアピールピクニックから帰って 親富祖 愛



聖書の一節を掲げて「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイによる福音書26章52節）

「ひろしまを考える旅」開催報告

なぜ核兵器を持ちたがるの？ 探求した3日間



日本YWCAが1971年から続けている「ひろしまを考える旅」。この春、呉・広島YWCAをはじめ、多くの方々に支えられて5年ぶりに開催することができました。

中学生からシニアまで、運営メンバーも入れて総勢42名が参加。基調講演に始まり、資料館見学や碑めぐり、フィールドワークや被ばく証言を聴いて、「なぜ核兵器を持ちたがるの？」というテーマを探求する3日間でした。最終日のプログラムは、全日程をみんなでふりかえるワークショップ。その後の「想いを伝える」の時間では、静かに自分と向き合い、今の想いを綴りました。

参加者の「想い」を紹介します。

●2023年3月25日(土)～27日(月) ●会場：日本基督教団広島流川教会



私には学ぶこと、 応援することができる

私達が動く時。私の今の生活は、食べて、勉強して、遊んで、寝る。私は中学生でこの生活を日常としている。1940年ごろの子どもたちにとっては、私達の普通が夢であっただろう。1945年8月6日の8時15分広島に核が落ちた。この時の子ども達は何歳であろうと国のためだと言って大人が始めた戦争に巻き込まれて学校にも行けずご飯はおろか、安心して眠ることさえできなかったという。子どもの時に見た光景は絶対に忘れることができないだろう。一生トラウマとなって消えることのない悲しい思い出になるであろう。

私は罪のない子どもや民間人の命をうばった戦争をもう絶対に繰り返



人に出会い、思いを聴き、思いを語る



プログラムの英語名「Pilgrimage to Hiroshima」
世代を越えた人々が共にひろしまの現在と過去を巡った

してほしくない。だけど、日本が被害者であるとは言い切れない。戦争をすることはおかしいし、朝鮮人達をどれいにしたのは日本である。もうやってしまったあやまちを正すことはできないけれど、あやまちを繰り返さないようにすることはできる。核を禁止にするということは、どれいにしてしまった人達への謝罪であり、反省である。

私はまだ中学生で、できることが少ないかもしれない。でも私には学ぶことができる、応援することができる、少しずつでもアクションしていくことが大切なんだ。

森山 灯 13歳

自分の言葉で 誰かに伝えたい

「なぜ核兵器を持ちたがるの？」というテーマで3日間平和学習をした。このテーマの答えが自分なりに出せるように「韓国・朝鮮人被爆者の歩み」というコースでフィールドワークを行った。このコースを選んだ理由は、ふだん親しみをもっている韓国との関係を知りたかったからだった。でも、いろんなお話を聞いて、昔、日本は韓国をどれいにして、植民地にして、いたことを知った。何も知らずに親しみをもっていた自分は勝手だと思った。この「ひろしまを考える旅」に参加して、自分の知らないこと、勉強したりしていないことが分かった。だから、自分なりに知らないことを減らして、今度は自分が自分の言葉でだれかに伝えていけばいいなと思った。

大久保 蘭 12歳



被ばくの痕跡に触れ、真実を知って自分事として考える



米国YWCA主催のレセプションに臨んだユースたち。世界のYWCAの仲間と交流を深めた

CSW67派遣報告 出会いと躍動の9日間

●2023年3月5日(日)～11日(土) ●会場：ニューヨーク国連本部

CSWは、毎年3月にニューヨークで開催される、女性の地位向上を目的とした会議です。日本YWCAは例年この会議にユースメンバーを派遣。今年は3年ぶりの現地派遣として、オンライン参加の1名を含む5名を送り出しました。

3月4日、ニューヨークへ飛び立ったユースたち。時差ぼけと長時間移動の疲労の中、目まぐるしくも刺激的な9日間を過ごしました。

ユースたちのハイライトは、2日目に実施したパラレルイベントです。今回は「ソーシャルメディアと性的搾取」をテーマに、オンラインと現地のハイブリッドで1時間半にわたって開催。対面約40名、オンライン約60名が参加しました。前年の秋から準備をしてきた彼女たちは、日本のマスメディアにおけるジェンダーバイアスについて、そしてソーシャルメディアと子どものオンライン性的搾取についての問題分析と展望を発表。後半は、参加者と共に今後の活動のアイデアを出し合うアクティビティを行いました。

イベントでは、オンラインツールを駆使して、対面とオンラインの垣根をなくそうと試みましたが、機材のトラブルなど、ハイブリッド方式での発表はなかなか困難なものでした。それでも、意欲的な内容と構成で、各国の参加者から好評を博しました。また、ユースの1名が日本の通信社の取材を受け、パラレルイベントの取り組みが複数の国内メディアで配信されました。

パラレルイベントを振り返り、5名は、次のような感想を伝えています。

●「イベントは成功した！」と参加者の真剣に考える顔を見て確信を持ちました。「もっと自分の言葉で伝えたい、話したい」と思えるような気持ちの変化を感じました。

東京YWCA N・K

●発表中や発表終了後に参加者から、「調査を含めてよく準備されていて、大変素晴らしいかった」といった感想を複数もらい、達成感と充足感を感じました。

京都YWCA M・N

●当日はさまざまなトラブルに見舞われましたが、準備期間の私たちのリサーチ、そしてプレゼンテーションの出来には非常に満足しており、努力の結晶だと思えます。

名古屋YWCA S・T

●CSW67は終了しましたが、ここで終わりではなく、ここがスタート地点として、性搾取の被害にあう子どもを一人でも多く減らすために、私にできる行動を考えて始めていきます。

名古屋YWCA S・F

●何度も壁にぶつかり、そのたびにメンバーと共に悩み、考え直し、進み、ゼロから1を創り上げてきたその過程と時間、そして何よりこのパラレルイベントは私自身にとってかけがえのない大切なモノであり、今後私自身が進

むための確かな指針となりました。

名古屋YWCA N・M

パラレルイベントという大仕事を成し遂げた後も、彼女たちは他のNGOや政府主催のイベントに参加し、知見を広げると共に内外の人々と交流しました。また、過密スケジュールの合間を縫ってパレスチナYWCAのメンバーと自由の女神像を見に行ったり、多国籍料理を味わったりと寸暇を惜しんで活動しました。最終日は、ユース・フォーラムに参加し、世界中のユースと車座になって話をしました。

たくさんさんの経験を持ち帰り、彼女たちは今、新たな気持ちでYWCAリーダーとして歩みを進めています。

日本YWCA職員 島舞衣子



「女子アナ」を例に挙げ、日本に根強いルッキズムとエイジズムを多角的に分析して発表した



編集後記



自衛隊のミサイル部隊が次々と配備され、公道を戦車が走る――。今、与那国、宮古、石垣などの島々で起きていることを、私たちはどれだけ知っているだろうか。政府は「南西地域は防衛の最前線、日本を守り抜く決意の表れ」と公言する。しかし戦争となれば、自衛隊や米軍の部隊が展開する「最前線」の小さな島はたちまち攻撃目標とされるだろう。太平洋戦争末期に唯一の地上戦が行われた沖縄で、再び住民が犠牲になるのを、今度は私たちが、傍観するのだろうか。それを「やむを得ない」と見過ごす空気を今、変えなければ――。

「燃えているのは沖縄だけではない」と指摘するのは、沖縄と戦争をテーマに取材を続ける映画監督、三上智恵さん。沖縄にいれば「日本が民主主義を手放そうとしているのが分かる」という。三上さんの新作ドキュメンタリー「沖縄、再び戦場へ（仮題）」が来春公開予定だ。現在そのスピノフ作品を無料で貸し出しし、各地で上映会が行われている。「見ざる聞かざる言わざるにならないで」の願いを受け止めたい。（編集部）

『沖縄、再び戦場へ』
https://okinawakiroku.com/

2022年度 寄付報告 (2022年4月1日～ 2023年3月31日)

活動へのご賛同、ありがとうございます

- 日本YWCA賛助費 1,615,000円
ピースメーカーズ募金 2,700,756円
日本YWCAユースエンパワメント募金 19,958円
東日本大震災被災者支援募金 2,313,140円
(うち、カーロふくしまサポーター 650,500円)
災害時支援募金 5,067,918円
(パレスチナYWCA支援、トンガ支援、ウクライナ支援含む)
オリーブの木キャンペーン募金 470,311円

【 2023年度もよろしくお願いたします 】

※当法人へのご寄付は、税額控除の対象となります。
※メールまたは振替用紙通信欄で次の情報をお知らせください。領収書を発行します。
①振込日 ②金額 ③お名前 ④ご住所 ⑤寄付項目
⑥お名前のアルファベット(オリーブの木キャンペーンへのご寄付のみ)
※ご希望の寄付項目を必ずご指定ください。
※年間3,000円以上のご寄付で、機関紙を発送いたします。

銀行への振込

振込先 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 1198743
(口座名義) 公益財団法人日本 YWCA
コウエキザイダンホウジンニホンワイダブリューシーエー

郵便振替 00170-7-23723 (加入者名) 公益財団法人日本 YWCA
他行からの振込 ゆうちょ銀行 〇一九支店(ゼロイチキョウ)
当座預金 23723
(口座名義) 公益財団法人日本 YWCA
ザイ) ニイホンワイダブリューシーエー

- ご協力ありがとうございます
賛助費
内山伸子
ピースメーカーズ募金
(平和を創り出す女性のリーダーシップ養成)
犬伏邦明 齋藤知子
日本基督教団代々木上原教会
代々木上原教会 カネさん基金
学校法人捜真学院
東洋英和女学院 中高部 宗教委員会
横浜共立学園中学校・高等学校
公益財団法人名古屋YWCA
日本YWCAユースエンパワメント募金
雀部真理 南城友佳里
災害時支援募金
(国内外の災害被災者支援)
犬伏邦明 内山伸子 嘉屋陽子
学校法人東洋英和女学院 宗教教育委員会
銚路YWCA
公益財団法人福岡YWCA
(オリーブの木キャンペーン募金)
犬伏邦明 高橋菜々子
日本基督教団代々木上原教会
一般財団法人函館YWCA
(ウクライナ支援)
北星学園大学附属高校 学校長
今城慰作
日本基督教団大阪昭和教会
0422市民クリスマス
一般財団法人函館YWCA
東京YWCA ウクライナ支援募金箱
(パレスチナYWCA支援)
嘉屋陽子
東日本大震災被災者支援募金
犬伏邦明 嘉屋陽子
田辺いづみ チャリティコンサート
日本キリスト教団市川三本松教会
日本福音ルーテル大森教会
日本基督教団経井沢分教会
学校法人東洋英和女学院 宗教教育委員会
ブルー学院中学校・高等学校
(カーロサポーターズ募金)
宗教法人在日本南フレスビテリアンミッション
カーロサポーターズ 56件
(2023年2月16日～4月15日)
敬称略